

その三 岩手山

万博の喧噪が消え世の中が静かになったせいも、涼しくなると急に秋めく。朝は涼しいと言
うより寒い。半袖はとつくの昔に消え長袖に羽織る物が必要になる。そんな折り一足早く冬を
迎える盛岡から速達が届いた。

前期の試験中にたまった仕事を片付けようと張り切っていたけれど休暇を申し出る。

伊丹空港は不便だ。地下鉄から阪急電車に乗り継ぎ最後はタクシーに乗らなければならない
なる。歩けない距離ではないが少しでも早く盛岡に行きたいのでタクシーに乗る。メーターが
ひっくり返ると心もひっくり返って苦い記憶がよみがえる。

*

中学二年生の冬。四天王寺に近い閑静な高級住宅街に住む伯父さんがアメリカに転勤するこ
とになったので、お別れパーティの誘いを受けた。本家瀬戸島の従姉波江ナミエからの連絡もあって
伯父さん宅に向かった。大阪にしては珍しく雪がチラついて静かな住宅街が沈んで見えた。伯
父さんにはいろいろお世話になっていたから、そう見えた。

紙芝居屋のオヤジは間違いなしの変人だが俺にとつて唯一の肉親だが、俺を構ってくれない。
小学生の時、給食代やPTA会費が払えなくて伯父さんによく泣きついた。中学生からは新聞

配達で何とか凌いだ、正月には驚くほどのお年玉を貰ったりした。

ところでオヤジはこの催しには来なかった。

伯父さんが身近にいなくなると思うと寂しくて仕方なかった。そんな気持ちで玄関のチャイムを鳴らしたら、つらい因果の「因」に巡り会った。

玄関には波江とセーラー服がよく似合う可愛い女の子が立っていた。波江に「失礼よ」と言われるまで見とれていたつけ。丸刈りの頭をかきながら「よろしく」なんて、さぞかし滑稽だったろう。

北川冬見^{キタガワフユミ}。伯父さんの奥さんの妹の娘。今想えば顔の雰囲気が美英子に似ていた。ただ美英子より口が大きいのに比べものにならないほど口数が少なかった。初対面だから当然だが口の大きさと口数は比例しない事が分かった。美英子の顔を消して記憶を戻す。

パーティが終わった時、伯父さんが「泊まって行きなさい」と言うのを「新聞配達で朝が早いから」と断り、冬見と一緒に伯父さんの家を出たのが付き合いの始まりになった。「新聞配達」という言葉が彼女の心を捉えた。

冬見を想い出すと心が痛む。それは伯父さんを想い出すからだ。

伯父さんはその日、預金通帳と判子をくれた。ゼロの数を見て驚いたのを今でも覚えている。「無駄遣いしないように」という前口上もなく「頑張りなさい」とだけ言われた。

そして、冬見が俺の頑張りの支えとなった。

朝、速達を受け取った。すぐさま伊丹空港に向かった。

*

*

花巻^{ハナマキ}行の航空券を買った。直行便がないので羽田で乗り換えなければならない。

羽田行のジェット機が滑走路に向かう。ベルト着用と禁煙ランプは点灯したまま。一旦停止するが、数分もしないうちにエンジンが全開する。丸窓から見える絵が矢のように流れ振動と共にそれらは眼下に、そして雲で消える。

冬見も俺もあまりにも幼かった。男は女ほど早く性に目覚めないし冬見も奥手だったから芽生えた初恋は高校に入っても深まらなかつた。しかし、高校生活も一年過ぎようとした時、冬見を大人にする事件が起こった。

歪な高度成長期だったからか父親の会社倒産から始まる一連の不幸。父親の自殺、母親の入院。伯父さんがいたら救いの手を差し伸べただろう。

髪の毛は短くなり目は薄くなった。可愛さが消えた。しかし、驚くほどキレイ……いや美しくなった。俺は引け目を感じたが、むしろ不幸な出来事が俺たちを急速に接近させた。冬見は俺が頑張り屋だと誤解して心の支えにした。つまり、お互い恵まれない境遇を慰め合い励ましあった。

このように不遇を美化したのが過ちだったなんて、今、言える事であの時はそうならざるを

得なかつた。現実など、高校生にどの程度、理解できるのか？ 対応能力がないから雰囲気に流されるように美化してしまう。不安に包まれた美化はお互いを苦しめるだけなのに。もちろん、そんな事は知る由もない。

当時、俺はモリ・PR・コーポレーションで働く夜間高校生だった。学年は同じだが年上の生徒がかなりいた。そのうち何人かは結婚していた。そういう環境がある手段を教えてください。まだ十六歳……軽はずみな事を考えた。わずかな収入とは言え働いていた。度重なるデートが沈黙に支配されるようになった頃、この手段が不渡りになる事件が起こった。

*

朝、速達を受け取った。すぐさま伊丹空港に向かった。花巻行に接続する飛行機で羽田まで来た。

*

今度はプロペラ機に乗り込んだが、なかなか離陸しない。出発が遅れるというアナウンスの中で、想い出を引き出すかのように、プロペラがぐるぐると回る。

デートは同じパターンを繰り返した。会う日、会う時間、会う場所、会ってから歩く道、別れる場所、そしてその時間——まったくの繰り返し。ただ天候だけが違っていった。晴れていても心は雲に覆われていた。

会話は息苦しい笑いで始まるが、すぐ途切れ、俺の冗談もただ空を切るだけになり、そして

その三 岩手山

沈黙が続いて別れるというパターンだった。しかも後味が良くなかった。

偶然という麻薬の香りの中で、どうにもならない現実^{リアリティ}に背を向けて、ただ不幸を美化するだけでは何の意味もなさないと言う現実と、そんな現実^{リアリティ}に対処する唯一の方法を漠然とでも知っていたから真剣に「結婚」を考えたが、年齢制限に気付いて愕然とした。

しかし、太陽の輝きですら分散させるスリガラスも雨に濡れると透けて見える。そのように愛の輝きをぼかしていた現実が残酷な破局を置く日がやってきた。

会う日、会う時間、会う場所は同じだったが、セーラー服は消えた。胸が膨らんだオレンジ色のセーターにグレーのミニスカートと黒いベルト。そして何よりも驚いたのは真つ赤な唇。大人の冬見が待っていた。化粧した女子の美しさに気付くと言うより打ちのめされた。

それは高校二年生の秋——紅葉まつただ中の秋だった。

いつもなら意識して冗談から始める会話が始まらなかった。いつもなら手を繋ぐだけなのに冬見は俺の腕を取った。いつもなら二駅ほど歩いて別れるのに、生駒の山へと向かった。

山は燃えていた。でも冷たかった。見つめ合う胸の中には愛情が、そして外では無情が流れていた。枝から離れた木の葉が空間に漂ってから一瞬静止してゆっくりと落ちる時が訪れた。

人生で一番辛い経験、そう、初恋が失恋となる瞬間が訪れた。

「私^{ワタシ}、も^もら^らわ^われる^るの^の」

*

朝、速達を受け取った。すぐさま伊丹空港へ向かった。花巻行に接続する飛行機で羽田まで来た。乗り換えたプロペラ機の離陸が遅れたため、花巻空港には一時間遅れて到着した。

*

タクシーに乗り込む。行き先は盛岡市内の病院。盛岡へは二度来た。

一度目は高校の修学旅行。この街のどこかの高校に冬見が通っているかも知れないと溜め息の中で盛岡城跡と石割り桜を見学した。二度目はほんの三ヶ月ほど前、北海道からの帰りで素通りしたから胸を痛める事はなかった。今度は違う。盛岡は目的地だ。

緊張と想い出が両目の下に汗を作る。盛岡で待つ事件は一体何か？ それは皮肉かもしれない。

タクシーは夕焼けの中、盛岡市内を走る。

美しく鮮やかで「明日は晴れる」というポジティブな気持ちにさせるのが夕焼けなのに、なぜ、夕焼けに「憂うれい」を感じるのか。一日の終わりを象徴するからか。終わりは始まりを意味するものなのに……なぜか希望に繋がらずに「愁うれい」に短絡する。

北上川が流れる美しい街並みを過ぎると小高い丘が見えてくる。その丘を遠回りするようにして登っていく。向こう側に大きな白い建物と池がある。その池を二分する橋を渡って止まる。

岩手山病院に到着した。釣り銭を受け取らずに走り込む。

「牧野冬見マキノフユミの病室は？」

「少し、お待ちください」

この時間が非常に長い。待つしかない。

「二百八号室です。その階段を上って左側の通路の一番奥の部屋です」

走る。駆け上る。走る。

「二〇八。牧野冬見」

ノックしようとしたときドアがスライドする。白い女が飛び出す。ベッドが見える。一歩足を入れる。涙の音がする。白い男が白い布を持つ。

「冬見……」

*

朝、速達を受け取った。伊丹空港から羽田まで来た。乗り換えたプロペラ機の離陸が遅れたため花巻には一時間遅れで到着した。タクシーを飛ばしたが病室に入る前に冬見は息を引き取っていた。

*

始めは腹立たしがったが今は放心状態。見知らぬ関係者が見守る中で冬見が眠っている。

「ああ、来てくれた。うれしい」

とでも、言いたげな表情を残していた。死顔に安らぎが漂っているように見えるのは、息を引き取って時間が経っていないのと落日の光の演出か。それともまだ一滴の涙も出ない乾いた

その三 岩手山

目に映る錯覚か。

死因は早産による母体の衰弱。冬見は二回も流産した。今回も母体安全を第一にすれば助かっただけ。

夫が四〇をひとつ、ふたつ超した年齢だと知ってショックを受けた。風貌からなかなか縁談がなかったと容易に推測できる。無愛想な態度とだらしない服装に違和感を覚えた。

どのような経緯でこの男の両親は冬見を養女に迎え結婚させたのか。この男の気持ちは別にして跡取りが欲しかったのだ。冬見は何とか応えようとした。いや、無理を吞まされたに違いない。

冬見は三度目の妊娠で初めて出産した。未熟児だった。

日が暮れて寺の本堂の窓に喪服に着替えた岩手山が見える。通夜が続く。秋冷の境内から麓の牧場に向かう。この牧場かは分からないが、翌年に受け取った賀状に「乗馬を習っている」とあった。

あの時……冬見は何故、住所を添え書きしてきたのか。一行の添え書きが三年後の今、因果という風（邪）となって俺を感染させるなんて……何てことだ。速達の住所は、三年前、彼女宛に出した俺の返事に書かれてあったものだ。

出産後、昏睡状態の中でうわごとで何度も俺の名前を呼んだという。生死を彷徨う人間の生への執着に気付いて速達を出したという事を通夜の時に知らされた。しかし、それらが三年前

その三 岩手山

のひとつの出来事に起因するとわかったのは今。

涙が出てきた。止まらない。因果を打ち消さない限り止まりそうもない。

冬見にすれば、今、俺がここにいるのは夢の出来事。俺は偶然居合わせているに過ぎない。たまたま黒い岩手山に背を向ける。

——あの時、強引に抱きしめたらどうなったのか

目の前にオレンジ色のセーター姿が浮かぶ。あの色は誘っていた。結婚しようと言えば頷いたはず。

今となつては何もかもが遅い。俺は三年前と比べるとひどく変わった。あの直後、夏子と知り合った。淋しさ、あるいは悲しみからの逃避を夏子に求めたのかも知れない。夏子はしっかりと受け止めてくれた。とにかく俺は変わってしまった。

冬見はつい先ほどまで生きていた。そしてそのまま化石になった。俺は変わってしまったが冬見は変わらなかつた。冬見の心の中に別の俺が生きていた。三年前の俺だ。今の俺をここに呼ばなくても良かったのに。

でも、ここに来る必要があつた。今となれば心を乳化して欲しかった。

もう涙はなく、目の前の、と言つても見えなくなつた岩手山を見つめる。三年前、冬見は岩手山を見て何を思ったのか——想像を止める。想いが振り出しに戻り一巡するだけだから。

夜が明けて周りが徐々に明るくなる。気分も少し軽くなった。落ち葉だらけの石畳の道を歩

その三 岩手山

く。ふと安らかな表情を湛えた冬見の死顔を思い出す。

——秋深し……

と、詠みかけて首を横に振る。冬見はその名前からして春を待ち望んでいたはず。

——来る春に 想い届いて 死顔見る

秋色の岩手山に背を向けて、来た道を戻り始める。牧場の時計台が朝を告げる。その鐘の響きを吸い込むように霧が広がる。しばらくすると朝靄アサミヤの中で氷の音が響く。

振り返ると岩手山を二分して一条の白い煙が上っていく。乱れることなく秋の空に吸い込まれるようにその煙はまっすぐ上っていく。しかもきらめいている。

*

昨日の朝、速達を受け取った。伊丹空港から花巻行に接続する飛行機に乗り羽田まで来た。乗り換えたプロペラ機の離陸が遅れたため、花巻空港には一時間遅れで到着した。タクシーを飛ばしたが、病室に入る前に冬見は息を引き取っていた。

翌日、朝靄の中で氷の声を聞いた。その時一筋の白煙が青空へ